記憶の巡礼～墓地書斎群～

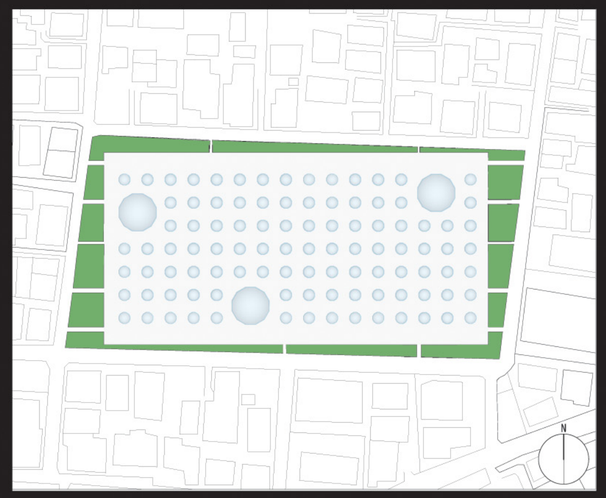
IT技術の進歩、情報の多様化･･･。
地域コミュニティーレベルでの情報の共有から、個人の身体の周辺へと情報は凝縮されていく。他者と情報を共有する機会が増加する一方で、その他者が匿名性を帯びてゆくのもまた事実である。
情報の盲目的氾濫状態。我々は情報を選択しているのか、それとも情報に選択されているのか･･･。

こうした時代において、図書館もまたその有り様を問われている。図書館にメディアテークとしてのあり方が求められていくのなら、多種多様な情報を包括的に網羅するシステムに対し、場所性によって炙り出される特定の情報を提供するシステムが存在してもよいのではないだろうか。

本計画においては、墓地的書斎群としての図書館を提案する。
その地に眠る死者の空間＝墓地をひとつの情報集積体と捉え、生前に人々が蓄積した情報・記憶の一部を構成する個々の蔵書を納めた書斎としてとどめる。生者は死者の記憶の集住体＝墓地書斎群にアクセスし、分類コードによって整理された情報ではなく、その場所に眠る人々の個性によって特化された情報の海を巡礼する。故人は家族墓、共同墓、個人墓等の多様な形態を有する書斎群に自らの蔵書をとどめ、情報の集合体としての図書館に豊かな起伏をもたらす。

死者が我々に残してゆく情報の集積体としての生きられた空間。
地域を支えてきた人々の記憶の一部がその土地固有の図書館を形成し、生者の空間から隔離された墓地は、都市の庭・日常空間・地域情報ネットワークの拠点として再生する。

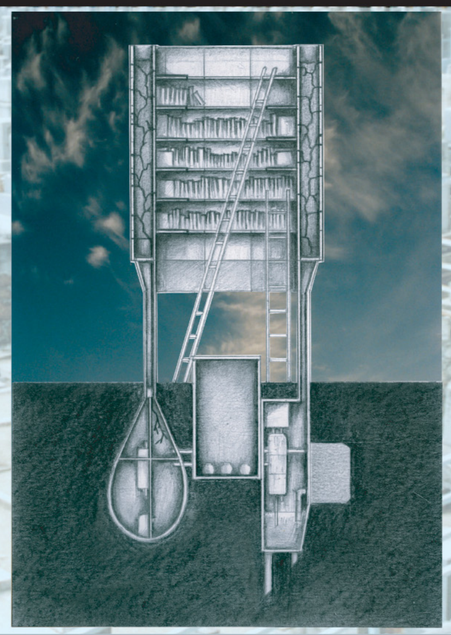
人々は都市の様々な場所に散在する、その場所にしかない情報の海を巡礼し、その土地を、人々を読み解き、自らの生を、死を選択してゆくのかもしれない･･･。



全体配置図

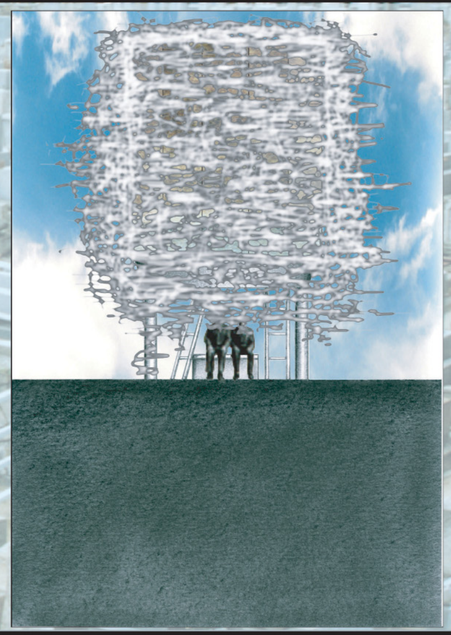
個人書斎・家族書斎

埋葬された記憶・情報はガラスの皮膜に包まれ可視性を与えられる。



環境装置としての書斎群

書籍を保護するためのブース内部環境を保つための装置は、同時に周辺環境を保護する装置としても機能する。酸性雨・排気ガス等を徐々に吸収し、一年のサイクルをもって浄化する。



慰霊のための装置

一年のサイクルを通して浄化された雨水・空気は個人の命日に開放される。霧は涙のように書斎を包み個人の死を悼むと共に、家族・縁故のための空間へと転化させる。

墓地空間の再生

都市内部において分断された生者と死者の空間は結節し、都市の庭・日常生活の一部・地域情報ネットワークの拠点として再生する。

共同墓地書斎

生前の多様な生き方により墓地書斎は様々な形態をとる。情報・記憶の集積体であると同時に、死者の集住体としての空間がたち現れる。

バラのかわりに本を添えて･･･